

Title	書評：浜日出夫・有末賢・竹村英樹編著『被爆者調査を読む：ヒロシマ・ナガサキの継承』慶應義塾大学出版会、2013年
Sub Title	
Author	中川, 清(Nakagawa, Kiyoshi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2014
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.19 (2014. 7) ,p.119- 122
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル：「書評： 浜日出夫・有末賢・竹村英樹編著『被爆者調査を読む』」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20140705-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評： 浜日出夫・有末賢・竹村英樹編著

『被爆者調査を読む——ヒロシマ・ナガサキの継承』

慶應義塾大学出版会、2013年

中川 清

本書は、「上空からのまなざしに抗して始められた」「戦後の被爆者調査」を、福島第一原発事故後の現在から、「読み」かつ「継承」しようとする共同の作業である（「はじめに」）。被爆者とは、広島・長崎への原子爆弾の投下を体験した死者と生者たちであり、被爆による両者の切断とその関係を包摂する。被爆者調査の多くは、被爆を直接体験しない研究者によって担われ、また本書の執筆者は、すべて戦後生まれである。「われわれはすべてヒロシマの生存者である」という「結びにかえて」のサブタイトルは、重ねられた被爆者調査と、それらを読む作業とが、被爆後に生きる「われわれ」の自己認識を何層にも積み重ねる営みであることを示唆している。

本書は8つの章で構成されているが、第1章と第8章は、全体の導入と現時点のまとめとして位置づけられ、第2章から第7章では、それぞれ独自の視点から被爆者調査が論じられる。以下、順番にみていきたい。

第1章「戦後被爆者調査の社会調査史」では、社会調査史という視点から、本書でとりあげられる被爆者調査の特徴が概観される。まず被爆者調査の時期区分が示される。厚生省「原子爆弾被爆者実態調査」が行われた1965年を境に（210頁も参照）、第1期と第2期に区分され、本書で論じられる多くの調査が実施された第2期は、70年代まで続くとされる。第3期は、70年代末から次第にその姿を明らかにし、福島第一原発事故からは、第4期が暗示される。その上で被爆者調査の素材や姿勢が、第2期までの体験と事実にもとづく「実証主義」から、第3期以降の記憶と言説やメディアにもとづく「構築主義」に移行すると指摘される。

上記の被爆者調査の時期区分の説明からは、第1期を「前史」、第2期を「最盛期」と位置づけることが許されるであろう。この区分は、社会調査史一般の時期区分とは異なるであろう。本書では、被爆者調査に固有の時期区分がなされたはずである。第1期の戦時・敗戦・占領という圧縮された社会過程と被爆体験との関わり、文学や写真などの「記録」を「前史」としてどう扱うのか。第2期に調査が本格化し、幅広い影響を及ぼすことになるのは、どのような事情によるのか。本章の時期区分の意義を認めるからこそ、被爆者調査に固有の展開を大胆に強調して欲しかった。

本章の中心部分では、「最盛期」の調査が個別にというより、いわば調査<群>として扱われ

ている。複数の被爆者調査の視線と姿勢が相互に交差することによって、全体として被爆者の形象を浮かび上がらせるからである。「破壊」(米山桂三)から「再建」(中鉢正美)への着目、死への眼差し(R.J.リフトン)から生への眼差し(中鉢)。これらの視線は二項対立ではなく、循環し時に交じり合う。この循環から脱するかのような、「漂流から抵抗へ」の「立場」(石田忠)、「罪意識」「葛藤」からの「精神的再形成」(リフトン)。これらの立ち位置は、循環する視線に支えられて微妙なリアリティを保つ。このように被爆者調査<群>が交差する構図は、単数の調査による被爆者像の「脱構築」を、「最盛期」の調査を合わせ「読む」ことの可能性を暗示している。

第 2 章「中鉢正美『生活構造論』の展開と二つの『被爆者生活史調査』」は、中鉢正美という個人の研究活動において、被爆者調査との関わりがどのような意味をもっていたのかを丹念に論じる。本章では、評者も院生として参加した「75 年事例調査」の分析をめぐる紆余曲折の解読に注目したい。広島で実施された「66 年事例調査」は、原爆による破壊の大きさを、被爆者世帯の階層的な回復の遅れで示すことができた。ところが 75 年調査では、一般世帯との階層的な差異を見出せなくなり、報告書では、辛うじて男性世帯主や男児を失った場合の破壊の大きさが例示されるが、男性の喪失という観点は、敗戦直後において被爆特有の困難とはいききれない。加えて世帯を単位とした自営業的な「再建モデル」では、高度成長下の親世帯からの分離や独立の動態を把握できなくなる。このため概念枠組みが「被爆世帯」から「被爆関係者人口集団」に拡大され、「被爆関係者人口集団」が一般集団以上に高齢化するために、世代間扶養の困難に直面する、という結論に至る。

けれども、子世代人口の縮小は、親世代が被爆後の困難を切り抜けて再建に向かった結果であり、少子・高齢化の傾向はやがて全国を覆うことになる。「被爆関係者人口集団」は、その傾向を先導したにとどまる。破壊と再建困難の生活構図にこだわる限り、逆説的ではあるが、被爆の形象は先へ先へと姿を変えてしまうのである。本章での「中鉢資料」の詳細な紹介と検討は、このジレンマを克服する可能性を、個別の生活史を作品化する作業に探る試みであるのかもしれない。

第 3 章「『長崎』をめぐる記憶の回路」は、長崎の「縮図」を的確に反映したとされる下田平裕身の調査論文「企業と原爆」を読み込むことで展開される。下田平論文は、企業の死亡者調査によって、「原爆死亡者」の数を徹底的に把握し、企業体の解体と再建の間に位置する「凍結」された被爆の形象を留めようとした。「原爆死亡者」は、本章の言葉を借りれば「被爆者カテゴリーの無効化」された概念であり、「死者」として抽象化されない具体性の凍結である。「原爆死亡者」をめぐる議論の展開は、本書で共有される「体験」と、「経験」という言葉との拮抗する関係を浮かび上がらせる。

本章では、「私的個人の体験が普遍的な経験へと昇華されず、体験の位相に留まること」(83 頁)で、経験として回収される「一歩手前の」体験に注目される。これまで言説化されてきた経験への強い懐疑が、体験に向き合う誠実な姿勢を形づくる。とはいえ下田平論文は、語られ

ない凍結を「清算」という一つの経験として定位させる試みであるともいえよう。経験への抽象化の批判と、経験への定位の試みとのせめぎ合いは、被爆体験に直接向き合おうとする背後にも、すでに貼りついているのではないだろうか。

第4章「爆心地復元調査が描いたコミュニティ」と、第5章「慰霊行為としての原爆被災復元調査」は、広島と長崎において、1967年頃から相ついで開始された復元調査の経緯と特徴を明らかにする。第4章では、湯浅稔らの「被爆関係者」の悉皆調査から始まり、広島市民が調査者の役割も担う「集団参与評価法」によって、爆心地復元調査として結実する様子が描かれる。復元地図は、人々の体験や記憶が塗り込まれた地域社会の形象であるという。第5章では、1970年から長崎市の調査事業として開始され、各種の市民組織を巻き込んで展開された爆心地復元調査活動が分析される。活動を担った人々にとって、復元調査は「地域の共同性の中に死者を意味づける」（142頁）営みでもあるという。

2つの復元図。被爆（放射能）にもかかわらず生きつづけられ、死者の記憶が想起される場所。原爆と敗戦の圧倒的な衝撃を科学技術への信仰に置き換え、「原子力の平和利用」を推進してきた、その後の歴史時間。そして現在、福島第一原発事故の被曝によって実質的に失われている場所。いくつものネジレ。福島の凍結された場所は、一体どのように描けるのだろうか。

第6章「原爆問題と被爆者の人生に関する研究の可能性」では、リフトンの *Death in Life* を「被爆経験を持つ集団の精神史」（156頁）を描く「心の傷」研究として位置づけて、この研究への当時の批判を検証することで、逆にリフトンの研究の意義が示される。詳細は本文に譲るが、以下は、評者なりの要約である。当時の批判の要は、被爆者が「他に類例のない存在」として扱われていない点である。けれどもリフトンは、それぞれの被爆者個人に対等に接し、差異と清濁をあわせ持つ、決して同じではない被爆体験を聞き取ることで、個別的な経験の束として「集団の精神史」を描いたのではないか。その描出力は、「他に類例のない」「集団の精神史」に近づいてはいないだろうか。

本章の最後では、2つの点が指摘される。その後リフトンは、被爆者が「被害者意識」から脱して、「生の再創造」の新たな段階を生きていると認識していること、現在もリフトンは被爆後に生きる「われわれ意識」にこだわっていることである。「研究の可能性」は、この2つを結びつける作業に求められる。

第7章「広島修道大学『被爆体験』調査における〈生者と死者〉」では、「原爆死者」の供養のあり方が、江嶋修作の1977年の論稿「『被爆体験』に関するシンボリズムの分析」を軸に検討される。江嶋は、「特別な死」の一般化と「ふつうの死」の（「あの人」に向き合う）個別化という生者による志向性の「分裂」に際して、後者による広島の統合機能に注目した。それを踏まえて本章では、遺骨のない多くの墓に、五十回忌を過ぎてなお供養が重ねられる現状から、個別化の志向性が「ふつうの死」とは異なる「ふつうではない」「特別な死」に再び向き合いつつあることに注目する。

本章の特徴は、リフトンと同じく「原爆死者」を特別視せずに、検討の範囲を「東京大空襲

の死者」にも拡げ、死者の供養を社会的機能から理解する点にある。印象批評が許されるなら、江嶋が示した一般化と個別化の構図は「分裂」するのではなく、今日まで併存してきたのではないだろうか。一般化した祭祀が形式的であれ営まれることで、容易に近づきたい「あの人」の「特別な死」に、現在も向き合えるのかもしれない。

第 8 章「被爆体験をめぐる調査表現とポジショナリティ」は、被爆者調査の「多様な方法意識」の観点から全体をまとめ、被爆体験を継承する手がかりを探る。その手がかりは、復元調査の位置づけに示されている。「社会学者が被爆者の語りから理念的思想を析出する(石田忠ほか引用者)のでもなく、実証主義的なカテゴリーに還元していく(中鉢正美ほか引用者)のでもなく」(224 頁)、「被爆者市民の協働を実践的に媒介することで、社会学者によって枠づけられる以前の被爆体験の生成と連鎖をはかった爆心復元調査。」(233 頁)「<参与する知>」が結実する復元地図の作成過程において、社会学者は「被爆体験の生成と連鎖」を調整し促進する「媒介者」であった。こうして「陳腐化・風化」しつつある被爆体験への「非体験者の<関わりの構築>」の一つの道筋が、証言者の被爆体験を高校生が絵に描いていくという実践の紹介と分析にもとづいて、「<参与する知>の媒介者」と非被爆者との協働による今後の「調査表現」に託される。

本章では、被爆者調査の方法意識の変化を端的にあらわす 2000 年前後の 2 つの作品がとりあげられる。『共感のつかの間の断片的瞬間』が『連携的な社会的・文化的実践』に結実する可能性に思いを馳せた米山リサ。(・・・) その可能性を、(・・・) 調査者である自らの身体に生起する(「一瞬の」引用者)『亡霊』=『トラウマの感染』との対話から検証しようとした直野章子(233 頁)。確かに、被爆体験と「われわれ」を無言で結びつける調査表現は、つかの間の一瞬の出来事に過ぎない。けれども、体験をとおして共に結びあう瞬間が描けるとすれば、今日の社会調査も、微かな手ごたえをつかむことはできる。

かつて評者は、「調査を読む」あるいは「調査の調査」ともいうべき 3 冊を取りあげ、書評論文を発表したことがある(「近代日本 100 年の自己認識を振り返る」『三田学会雑誌』83 巻 3 号、1990 年)。この 3 冊に共通した現状認識は、社会調査におけるテーマの喪失であった。本書を読みながらあらためて感じたのは、執筆者たちが、それぞれのフィールドで被爆体験に関わり、被爆後の課題と誠実に苦闘していることである。執筆者たちの「ひそかなこだわり」に促されて、本書が出来上がったともいえよう。大文字のテーマが失われたかのような現在、「ひそかなテーマ創出」が重ねられ、本書のように結びあう作業の方法は、確かな可能性を秘めているように思われる。

(なかがわ きよし 同志社大学政策学部)